

飛鳥宮跡活用検討委員会(第2回)の議事要旨【概要版】

日 時：平成29年1月20日 13時30分～16時30分

場 所：奈良県文化会館

出 席：委員長 田辺 征夫

委 員 黒田 龍二、小林 牧、櫻井 敏雄、菅谷 文則、染川 香澄、
田島 公、寺西 和子、増井 正哉、松村 洋子、森川 裕一
(欠席：仲 隆裕)

事務局 奈良県公園緑地課

関係課 奈良県 南部東部振興課、文化資源活用課、平城宮跡事業推進室
文化財保存課

明日香村 総合政策課、明日香村文化財課

飛鳥宮跡とはどういう遺跡であるかについて共通認識を得たい。飛鳥宮跡の価値をどう伝えていくかについて議論いただきたい。

- 飛鳥時代に初めて宮殿という概念ができた。飛鳥寺のような最先端の建築様式ではなく掘立柱構造であったところに日本の国家観があり、日本の伝統になっている。
- 飛鳥浄御原宮にあった遺物の一部が正倉院に残っている。
- 大宝律令の成立した西暦701年が古代国家成立の画期だが、その前提となる飛鳥浄御原令は飛鳥浄御原宮で定められ、それに則って政務が行われた。また、大陸から最高の文明が伝わり、国家としての基礎が整った。
- 宮殿は、そもそもなかなか立ち入れない場所なのだとすることを踏まえて、どう活用するかを考えることが必要。なお、古代の儀式は、建物の中ではなく庭で行われた。
- 飛鳥宮跡には、四つの宮殿が重なっており、一番上層の飛鳥浄御原宮を中心に考えたいが、一方、乙巳の変などについても情報発信のコンテンツとして考慮する必要がある。
- よく知られた乙巳の変を説明するには、飛鳥板蓋宮についても理解してもらえる仕掛けが必要で、人物を中心としたストーリーで説明することが大切だと思う。「何を伝えるか」が、「いかに整備するか」と連動していなければならない。
- 飛鳥の宮にどのような物語があったのか、誰がいて、何を思い、何をしていたのかを伝えていく手法を検討すべき。ITCも含め、色々な手法が取れると思う。
- 飛鳥宮跡を案内する時、現代と関連させながら話をすると身近に感じてもらえる。また、デジタル技術や発掘調査時の写真を活用して昔の風景を想像してもらうことで、よく理解してもらえる。
- 歴史の現場を補完するため、この周辺の情景や雰囲気をデジタル化して復元し、組み合わせで見せたらわかりやすい。目に見える形を造ることは重要。
- 飛鳥宮跡の価値を誰に伝えるのかというターゲットを設定すべき。受け取る側の人たちにとって、どういう内容・手法がよいのかという視点が必要。

- 何を伝えたいかがはっきりすれば、どんな手法が必要かは考えやすい。
- 飛鳥宮跡がなぜ貴重なのが、特に知識を持っていない一般の人にも分かるような展示施設を作ることも必要ではないか。学説が二つあれば二つとも並べて、論争に参加できるようなものもよい。
- これまでは、史跡を発掘・調査し、整備してからどう活用するかを考えるという流れだったが、この委員会では、まずどういう活用があるかを考え、それに合わせた整備を考えたい。土地の公有化が進んでいなくても活用できる方法が発想できれば、活用が公有化の促進にも役立つ。
- 飛鳥宮跡の整備する際には、まず分かりやすく表すことを考えて、宮の大きさや建築物の大きさを考えるべき。大きさを示すためには、四隅の位置をはっきりさせ、柱状のものではなく板塀で示して欲しい。
- 飛鳥宮跡の井戸の部分の東北隅が、ちょうど宮の東北隅になる。この部分で三次元的に塀を造ったら、重量感と立体感が出てくると思う。
- 建築物をほんの一部でも具体化することが大切で、そこにデジタル技術などを用いて、より立体感や臨場感のあるものが造ればよい。
- 仮に立体的なものを造るとなると、当然高さや材質などの根拠を求められるが、その点ではむしろ建物の方が造りやすく塀は難しい。
- 遺跡や歴史的建築物や街並みというと、大きな景観のレベルで判断しがちだが、歴史の物語を語るときには、手触り感や色彩、高低差、あるいは区切られたスペースなど小スケールで体験できるような仕掛けも必要ではないか。
- 飛鳥板蓋宮など下層の遺跡を知るためには、一旦上層を壊さないといけない。そうまでして下層の宝物を掘り出すなどということはやらない方がよい。宮跡を中心とした明日香村のイメージ・景観などの全体像が重要だ。空間的な広がりや歴史を幅広く検討すればよい。
- 具体的な宮跡の整備イメージと景観保護をどう調整するかが課題になる。建築物を考える前に、風景・景観の保全はもっと重要。
- 今後、建築物を計画しようとするならば、地表と遺跡の深さとの関係を知っておかなければならない。井戸の付近で現在の水田耕作面から 7-80cm、役場の前付近で 3-40cm 位あるはず。
- 現地の来訪者が立つ地面の状態がわかれば、その上にどんな柱や塀や建築物を建てるのかを検討できる。
- 宮跡の現状は田畑で、南から北に向かって段々と緩やかに傾斜している。整備の手法については、景観上の論点も踏まえてよく検討したい。

7 世紀の建築物の復元は難しいといわれるが、それでもやはり何か立体的なものがあればよいという思いは共有したい。本日のご意見を参考に、資料の修正、作り込みを行った上で、次回は景観を軸に議論していただくことになっている。引き続き、よろしくお願いする。